

新約単篇 第二ペトロ書の福音

続「新約聖書のギリシャ語を学ぶ楽しさ」

「小辞典」電子版の紹介講演

2ペト2:21,22

CD制作発表会 (45分版)

御紹介いただきました織田 昭でございます。このグリーンの辞書とチョコレート色の辞書をご利用くださいました方々に、まず感謝を申し上げます。35年前に初版を刊行して以来、二回に亘って部分的な修正はいたしました。今回、長年願ひ続けた全面的な改訂を、能城一郎先生と JCBR の御協力を得て、CD-ROM の形で実現いたしました。

私のテーマは、J-ばいぶる 2 のアドオンとしての“改訂第 4 版”で書き改めた部分の例をいくつか紹介させていただいて、この小辞典の内容をお薦め申し上げ、今後ご使用くださる兄弟方のご高評を賜りたいというお願いでございます。最初の例は、香油を入れた器物の訳語で、特に神学的な重要性を持つほどの違いではないのですが、イエスの頭に香油を注いだ女性の物語のイメージが、これで少しく変わるかも知れません。プリントでは 1 頁の最初の項目 ἀλάβαστρον です。

新しい聖書辞典をお使いの方はお気づきかも知れませんが、ドイツの BHH を訳した教文館の「聖書大事典」には「石膏の壺」の項目が無くて、アラバストロンは「ガラス」の項に入っています。「セッコウ」の見出しは、あるにはありますが、矢印で「ガラス」(を見よ)と参照しています。これは驚きでした。文語訳の時から「ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ちて、近づき来り」と習ったのに、それがシリア産のローマングラスの細頸の瓶だということです。

私の疑問は一昨年、河口湖の久保田一竹記念館の別室展示場で、そのローマングラスの細頸瓶が並んでいるのを見た時に、半ばは解けました。テキストの1頁1行目の①の所から御覧ください。

ἀλάβαστρον, (ローマングラスの) 細頸瓶；香料などの保存用に使われた容器；従来、雪花石膏という鉱石を削りまた削り抜いて作った「雪花石膏の瓶」と考えられたが、水晶を意味する中国語の「玻璃」がガラス器を指すようになったのと同じく、**ἀλάβαστρον**は当時シリアのシドンを中心にして造られた、いわゆる「ローマングラス」それも細頸の瓶を指す名称であった；参照→教文館「聖書大事典」BHH中の「ガラス」の項、松永伍一著「ローマングラス」京都書院。

松永伍一さんという詩人は、ローマングラスの神秘的な美しさに魅せられて、各地のバザールを回って収集なさった方です。この金属の光沢に似た汚れは、土の中に千数百年埋まっていた間に、不純物が化学変化を起こしたのですが、その不思議な光沢のガラスに恋をした松永さんの詩が瓶の解説を兼ねていて、前置きと後書きはヨハネ伝の「ベタニアのマリア」の話で始まり、締めくくられています。著者は私の質問に答えて、古代ガラス関係の参考書も教えて下さいました。

確かに文字通りのアラバストロンの石を削りぬいた壺も、トルコなどのみやげ物屋で買えますが、どれもコロンとした丸く短いもので、アンプル型の細い密封容器で首の部分を折るようなものは、写真でも実物も見たことがありません。私は北京の故宮博物館で水晶の単一結晶で造った花瓶を見ました時に、ガイドの青年に「昔は水晶のことを『玻璃』と言ったでしょう」と聞いてみましたが、彼は知らなかったようです。「昔も今も『玻璃』は **boli** でガラス、水晶は **shuijing** ですよ。」もう少しで「でも昔はサンスクリットから音訳してあの字を…」と言いかけた私は「そうか。 **ἀλάβαστρον**にも同じことが起こったのだ」と納得しました。

以上は新しい資料による書き加えですが、「この女のしたことも記念として語り伝えられる」と主が言われた、そのナルドの芳しい香りを少しも変えるものではありません。

では次に、使徒パウロの激しい言葉のニュアンスを大いに変える例を一つ…。同じ1頁の下にある最後の項目**βασκαίνω**を御覧ください。ガラテヤ書より500年前のアテネ標準語の発音では「バスカイノー」です。ガラテヤ書では3章の冒頭に出ます。

ここは信仰の道から律法へ落ちて行くガラテヤ人を、パウロが激しい言葉で叱責するところです。「ああ、愚かなガラテヤ人。いったい誰があなたたちを惑わしたのか！」この箇所については、古典的な注解書では、「愚かな」**ἀνόητοι**という形容詞には、罵倒や軽蔑の意味は無いという言い訳ばかりが書いてありまして、今の新共同訳のような訳語の背景にもなっています。「ああ、物分りの悪いガラテヤ人たち。」

ところが肝心の「惑わした」**ἐβάσκανεν**については、適切な説明が無いのです。Bauer辞典の英訳では「魔法にかける」と「妬む」が並べてあるだけで、よほど考えないと、この箇所の釈義とは結びつき難いようです。岩隈辞典は一言説明が親切ですけど、パウロがこの言葉を使った趣旨を汲み取るには、もう一步の感じます。下から8行目。

βασκαίνω 妬みの目（凶眼）で見つめて毒する、羨みと悪意の視線で相手に災いを及ぼす；ガラ3:1 **τίς ὑμᾶς ἐβάσκανεν**；だれが君たちを凶眼の毒に当てたのか？、いったい誰の凶眼に当たってこんなことになったのか！；アリストテレス以来、現代ギリシャ人に至る**βασκανία**（**βασκανιά**）の俗信は、子誉め「まあ、可愛い！」や若い女性へのお世辞「なんてきれいなんだ、君は！」に使う《**Νὰ μὴ βασκαθεῖς.**》（人の羨みの凶眼に当たらぬようにね！）の中に生きている；教父クリソストモス**Χρυσόστομος**の註、「パウロのこの叱責にはガラテヤ人たちへの称賛（以前の純粋な福音信仰への）も込められてい

る」が示唆に富む。

この教父の註は、若い時からギリシャ人の注解に原文で引用されているのを見ても、よく分かりませんでした。クリソストモスの趣旨は「あれだけ、人も羨むようなキリスト信仰を与えられていたのに、律法の義に頼るようになるとは…。これは誰かの“凶眼”に当てられたとしか考えられない。惜しい！」ということで、パウロの言葉は叱責の形を取りながら、福音による子を思う愛に溢れているのです。

この動詞の意味を読み取れるようになったのは、1968年の春に、アテネの夕刊紙を読みましたら、ニンニクをレイのようにして首にかけたオバアサンの写真が第1面に出ていて、「春の風物詩、ニンニク売りが広場に」という見出しに、もう一行「悪い眼にニンニク。毒消しになるよ」とありました。その evil eye に当る“カコ・マティ”が、悪意の凶眼——正しい文語体の名詞は *βασκανία*, 動詞が *βασκαίνω* だと聞いて、「ああ、ガラテヤ書 3 章のあそこだ！」と気づいて、ギリシャ人の凶眼にまつわる民話や迷信、それに、アリストテレスも書いているニンニクの毒消しまで、年配のギリシャ人から聞かされました。

もちろん使徒パウロは、妬みの凶眼で見つめられた可愛い子ちゃんが急病で早死にするというようなことを、信じてはいなかったでしょう。でも、このギリシャ語に込められた センチメント は知っていた訳で、それが「何ということだ。あの一途なキリスト信仰が、こんな律法の道へ落ちるとは！これは、君たちを羨みの目で見つめていた、誰かの凶眼が諸君を害ったとしか思えない」という言葉になって、彼のペンから迸ったのです。次の例は、パウロのテモテへの思いと肩入れを表現した 5 頁の *καταφρονῶ* (*καταφρονέω*) です。

これは第一テモテ書 4:12 に出て来る、使徒パウロが弟子テモテに与えた言

葉に出ます。「あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。」これを聞いた若い伝道者テモテは、大先輩の言葉をどう受けとめて、何を感じたとお思いになりますか。Guthrie を見ても、Jeremias を見ても、「人が軽んじるような口実を与えないような、模範的な生き方を通して、お前の年齢では欠けているところを補わねばならない」という説明が多いようです。これは多分、“Don't let anyone look down” のような“間接命令文”の意味に解して、「しっかりやれ。軽んじられるな！」の意味に訳すからでしょう。

実は、英語やドイツ語には無い、3人称への命令法という表現はギリシャ語独特でありまして、“Don't let him” よりずっと重く、「だれであろうと〜することは **この私が許さない**」という、話者の強い意志を表現します。5 頁下の段落、3 行目のコロンの後を御覧下さい。

1 テモ 4:12 μηδείς σου τῆς νεότητος **καταφρονείτω**, 若年の故にお前を軽んじることが今後（この私パウロが）だれにも許さない——この3人称への命令形は「軽んじられないようにせよ」というテモテへの注意と言うよりは、「何びともテモテを軽んじることが断じて許さない」という使徒パウロの、強力な後ろ盾と保証の言葉である。

この言葉は、テモテにとっては大変な励ましでありましたし、福音の先輩である恩師の思い遣りに、テモテは勇氣百倍したと思います。以上二例は、使徒パウロのガラテヤ人への愛と、若い弟子を福音の故にカバーして「だれにも侮辱することを許さない」宣言とでした。ガラテヤ書の方は、多くの人が見落としていた、ある動詞の意味の発見から、テモテ書の方は、ギリシャ語の命令法3人称の確認からです。

7 頁真中の **πλήρωμα** へ行きます。πληρῶ (満たす) の名詞形です。ここは、古典ギリシャ語から現代ギリシャ語に至る、この語の広い用例から気づいた、

エフェソ書1章23節の意味です。これは7頁の真中の項目πλήρωμαですが、エフェソ書はその4行目に出ております。

この箇所は、中心部だけ引出してみますと、「**教会は神のπλήρωμαである**」となります。もちろん「プレーローマ」とお読みになっても宜しいのです。ここは大抵、「**教会は神ご自身の充滿そのものだ**」とか、「神の本質が満ち満ちて、教会という形を取っているのだ」という、神学的な意味に受けとめられがちです。辞書の原稿では一行目の終りから二行目にかけて、①満たされたもの、…充滿の意味に解釈されてきました。この意味もちろん辞書には掲げてありますが、私はこのπλήρωμαはむしろ a. の「(欠けた所や空いている部分を) 満たすもの、充填物、詰め物」の意味に理解したほうが、エフェソ書の文脈では、より具体的で意味がリアルになると思いました。このヒントを40年前に頂いたのは、渡辺善太氏の「聖書論」からでした。その後、古典での使い方や現代語の用例から、次のような説明をこれに加えてみました。テキストの7頁、4行目から御覧下さい。。

エフェ 1:23 τὸ πλήρωμα τοῦ τὰ πάντα ἐν πάσιν πληρωμένου はヒエロニモス以来「全てを使って全てを満たす方(神)の充滿が教会である」と①の意味に解釈されることが多いが、ここはむしろ、(この空虚な世界に)「神が詰め込んだ**充填物(詰め物)**こそ教会なのだ」と②の意味に読む方が、パウロの趣旨に沿うかと思われる。古代では、中空の船を満たすものとして船員たちがπλήρωμαと呼ばれ(現代では航空機の乗員—ギリシャ・オリンピック航空のクルーも) また都市国家の住民も地の πλήρωμαと考えられた。

教会とは、主がお呼びになった生きた人間、あなたや私のことなのですが、その私どもが、**神がこの空虚な世界に詰めた充填物である**というエフェソ書の宣言は、私にとって飛び上がる位の発見でした。普通は抽象的に考えられるこの語の、一つの理解としてご参考までに…。

さて、能城一郎先生が「新約聖書ギリシャ語を学ぶ楽しさ」という題をつけてくださいましたので、少し“楽しくなる”話をせねばなりません。私たち平凡人にとって、ギリシャ語の学びには根気と練習を抜きにした“楽な”勉強法はありませんけれど、ちょっと知恵を使えば、ギリシャ語の音に耳を慣らしたり、映画の一場面と結びつけたりして、楽しむこともできます。40年も前のアメリカ映画「日曜はダメよ」は、セリフは英語でしたが、主演女優のメリナ・メルクーリさんが歌った主題歌はハジダキスが作曲したギリシャ語の歌詞でした。

“Απ’ τὸ παράθυρό μου στελ ἕνα, δύο καὶ τρία καὶ τέσσερα φιλιὰ,” という歌詞などは、当時の私には文法書の「数詞」の頁を生きたものにしてくれました。今でしたら、有名なアングロプロス監督の作品「旅芸人の記録」、「シテール島への船出」、「アレクサンダー大王」などは、NHKのBSでも繰り返し放映されています。

「シテール島」の大事な場面が出るセリフ「私だよ」《Ἐγὼ εἶμαι.》は、俳優のオーディションの場面で、何人もの男の人が次々に監督の前に現われて、《Ἐγὼ εἶμαι.》をいろいろな言い方で反復します。私は原型の「ある」という動詞《εἶμι》の活用を思い出していました。

「アレクサンダー大王」は古代の話ではなく、100年前に脱獄してアレクサンダーを名乗り、人民の開放者として山中にたてこもった独裁者の悲劇です。この映画の中で、村長を演じる老優クリストフォロス・ネゼルさんが、突然、ローマ書のパウロの言葉を口にする場面は、驚かされました。《ταλαίπωρος ἐγὼ ἄνθρωπος.》「何と惨めな人よ、この私は」(ロマ 7:24) そのネゼルさんのサインを、私はエピダヴロスで頂いて、持っております。

ギリシャ映画など御覧にならない方にも、簡単に利用できるのはCDやカセットで聞けるギリシャ音楽です。私はナナ・ムスクリのレコードが好きで、放送から録音したり、知人からダビングしてもらったりして良く聞きました。クラシックの方では、メゾソプラノのアグネス・バルツァがハジダキスとテ

オドラキスの曲を歌ったものが出ています。もちろん、いきなり聞いて歌詞の全部が分かる訳ではありませんが、その中から二つ、三つの単語が聞き取れて、生きたギリシャ語の響きを感じ取れば、愉快じゃないですか。

「汽車は8時に発つ」 — “Τὸ τραίνο **φεύγει** σὲς ὀκτώ.” の **φεύγει**が教科書に出る **φεύγω**の現在3人称とか、**ὀκτώ** が数詞の「八」で「蛸」の **octopus** と繋がるとか…聞き取れば楽しいものです。最近では、インターネットでギリシャ放送協会にアクセスして、現地の中波や **FM** の放送を同時で聴くという“裏業”もあります。

とは言いますが、音楽や映画でギリシャ語に親しむのは、趣味か遊びの部類に属します。より本格的な練習法は、絶えず新約聖書の朗読に親しむことです。私は大阪に毎日出講していた頃は、学研都市線の電車の中でイヤフォンを掛けて聞いていますと、「このジイサン、朝からロックでも聞いているのか」という視線を周りから感じました。英語のニュースを聞くのと同じように、聞いた瞬間に意味が理解できるためには、かなりの時間を電車に乗らねばなりません。ついでに、正確なスペルが電光文字になって走れば言うことなしですが、これには相当年季が要ります。

こういう耳からのトレーニングが得意でない方には、欧米の新しい辞典に親しむとか、勝れた注解書からヒントと洞察を得るといふ、本来の正攻法をお薦めします。今回の第4版も、この35年間に **Nida** や **Kittel** の辞典とか **Käsemann** や **Barth** の注解書などから拾い集めた宝と、二十数年かけて大東で試みた約800編の講解説教からの収穫の一部です。以下は福音の中心思想の表現に関わる語彙に属しますが…。最初は6頁の下にあります **πάρεσις** (赦免) を取り上げます。

πάρεσις, ἥ (<παρίημι 見逃す, 赦す) 見逃すこと, 無罪放免, 罰の免除, 赦免; ロマ 3:25b-26a

διὰ τὴν πάρεσιν τῶν προγεγονότων ἀμαρτημάτων ἐν τῇ ἀνοχῇ τοῦ θεοῦ,すでに犯されてしまった罪過を神の寛恕（広いお心）で全面的に赦免なさろうとして； τὴν πάρεσιν は、「キリストによる完全な赦し」（πάρεσις= ἄφεσις）を意味し、中世以来の古典的解釈に見るような、アダムからキリストまでの間の「罪の処分も義も無いままの看過」（=使 17:30）ὑπεριδῶν を言うのではない； πάρεσις が語源から「一時的見逃し」を指すのではないことは、ἄφεσις が語源から「そのままにして放置する」ことを指さないのと同じである；（以上が引用）

古い辞書 Abbott-Smith などやはり、昔の解釈に基づいて「放置して見逃しておかれた」意味に理解していますが、これはケーゼマンやブルトマンも指摘する通り間違いで、正確には完全な赦しの意味だと思います。（本文に戻ります——「上記」というところ…）

上記ロマ 3:25b διὰ τὴν πάρεσιν 以下の意味は「この（神の義に示された）全面的な赦免は、まさに神の広い心から出たものだったが、こうして、イエスを信じる足場に立つ者を“義人に変える”という形で、神御自身が義を實現せずにおかぬ方であることが、事実をもって示されたのである」；参照ケーゼマン註解，フランシスコ会訳。

次の例は、従来「契約」という訳語が充てられてきた名詞 **διαθήκη** と、その「**契約を結ぶ**」という動詞 **διατίθεμαι**に関する改訂です。英語では※covenant?と訳するのが慣例です。もっともこの“covenant”も、果たしてパウロやヘブライ書の言う **διαθήκη** の訳語として適切かと言えば、問題があると思います。今日は英語の訳し方には立ち入りません。この単語はプリントの2頁の上に出ています。

私がこの **διαθήκη** の訳語に疑問を抱くようになったのは、三十年も前のことでしたが、その理由は、一部の人たちの間に見られる律法主義の傾向が、どうもこの「契約」という訳語を曲げて利用していると思えたからです。こ

の語を人間の「双務契約」のように受けとめますと、神が命じたことを正しく守れば命が与えられ、これを守り果せなければ、神との「契約」は無効になるという「引換え」主義、「功績」主義になって、福音の本質から外れたものになってしまうからです。

二十年前にガラテヤ書の講解をして、この訳語の問題を意識するようになった私は、十年前にヘブライ書を講じた時には、かなりはっきりした理解を持つようになりました。Althaus のガラテヤ書注解と、Strathmann のヘブライ書からも示唆を受けましたが、やはり、一番有益だったのは Kittel 辞典にあった 30 頁に亘る διαθήκη の項でした。2 頁の 1 行目へ…。

διαθήκη, -ης, ἡ (<διατίθεμαι 処置する, 裁量する) ① (自分の判断・裁量で行なう) 意志表示, 自ら裁量したこと, 裁定, 取り決め; 遺言 (書) .

…以下、辞書の本文を続ける前に、一言コメントさせていただきます。

この「自分の判断で事を決める」**裁量、裁定**というのが、この語のいちばん基礎になります。次に出る動詞がまさにその「自分の裁量で処理する」ですが、まだそこへは飛ばずに、名詞の上から 2 行目あたりに戻ります。これが文書としては「遺言書」などに最も代表的に適用される訳です。神と人の契約という場合は、この διαθήκη の創始者である神ご自身が「裁量なさった」聖なる意志に人間が服する関係を言うのです。次の a.項を御覧ください。上から 2 行目にある a.です。

②(一方の主體的裁量や約束を他方が受け入れ服する形での) 裁定と受諾の関係、(特に) **神の裁量に服して生じる関係**，“聖意志表示=受諾”の関係，“**聖裁定=服従**”の関係、「ベリート」の関係；(従来の慣例的訳語では)「契約」；《普通の双務契約や協定，協約の関係を表す語としては συνθήκη が使われたのに対し，διαθήκη は旧約聖書の「ベリート」また「ベリートを切る」

関係に (LXX を通して) 適用された. Kittel 神学辞典の Quell と Behm の 30 頁に亙る論文を参照. 特に Behm の「διαθήκη と διάθεσις の意味は近接した関係にある」(英訳 p. 125) は現代ギリシャ語の Εἶμαι στὴ Διάθεσή σας. = I am at your disposal. (「私はあなた様の裁量のもとにあります」 = 「いつでもお命じ下されば お役に立たせて頂きます」) とつながって面白い.

訳語の私案として, 例えば, 「新契約」の代りに (神の) 「**新裁量**」, 「契約を立てる」の代りに 「**裁量を制定(施行)する**」等が良いと思うが, 「契約」や “covenant” に馴れた日本人には異様に響くだろうか?

以上は, 余りにも慣例化した「契約」という訳語を捨てられない人も多いと思ひまして, 一歩譲って書いております. 当分は “covenant” と「契約」を流用しながら, 徐々に διαθήκη の内容を代入して頂けたら●というのが, この辞典の著者の願いです. 次の項はその、契約を「結ぶ」と訳されてきた動詞 διατίθεμαι の意味を再検討します. 同じ 2 頁の真中の項目です.

διατίθεμαι (自分の裁量で処理する意味から) ①思うままに処理する, 自分で事を決め(て委ね)る, 自身の判断で一任する, 遺言する. ② [旧約の表現「ベリートを『切る』」をギリシャ語で表現して] (神が民との関係で) 聖なる意志決定を伝える, “聖裁量=受諾服従” の関係を (神のイニシアティブで) 制定する, “一方的約束⇒信順” の関係を (神の側から) 創始する, (神の) 裁量を発布(制定)する; (従来)の慣例的訳語では「契約」を「立てる, 結ぶ」, また (「契りを」) 「契る」という訳語の提案もあるが, 上述の「裁量による一方的約束への信従」の意味が出ない; 《ヘブライ的表現「ベリートを『切る』」の『切る』は使 3:25, ヘブ 8:10, 10:16 ではこの動詞 διατίθεμαι を使って (言わば「裁量を裁量する」と) 訳し, ヘブ 8:8 では ποιῶ で (言わば「裁量を施行する」と) 訳出されている. →名詞 διαθήκη の項をも参照》

先に読んだこの頁の上の部分です. 以上は「契約」と訳されてきた語の本来の意味を考えるために, 何らかのご参考になると信じます.

次は形容詞 **ώραῖος** す。七十人訳の奇妙な訳語を参考に、イザヤ書とローマ書を結びつけます。

ώραῖος, -α, -ον (<ώρα) (原義：季節の、旬－シュンの) ①時機を得た、タイムリーな；——その例文のところ——

ロマ 10:15 **ὡς ώραῖοι** οἱ πόδες τῶν εὐαγγελιζομένων, 福音する者たちの足は 何とタイムリーに来ることよ、時機を得て素晴らしいことよ。②きれいな、美しい、麗しい、魅力的な；《参考》現代語では専ら②の意味に使われるが、本来は「季節の」、「旬の」を意味した。上記ロマ 10:15 に引用されるイザ 52:7 については LXX の **ὡς ὥρα** (なんと適時に) から見ても、これは福音使の足の美しさを称えて伝道者の使命の尊さを伝えるのではなく、神が遣わす福音使が、神の定めた最も適切な時機にタイムリーに来ることを感嘆する文であり、またそう見る方がローマ書10章の文脈と趣旨にも適合する。

私はここは、パウロがギリシャ語訳からそのまま引用したと思いましたが、当然パウロのと同じ形容詞が出てくるものと予想して、七十人訳を開いてみてびっくりしました。LXX は **ώραῖοι** —beautiful という形容詞でなく **ὥρα** (時、時期) という名詞が使っていました。**ὡς ὥρα** “What a time !” というのは “How timely !” の意味です。

次は、聖書の起源と靈感に関わるペトロとパウロの言葉です。この「聖書の起源と靈感」は実は第2ペトロ書の方なのですが、大抵の方は第2テモテ書の中に読み取ろうとしますし、第2ペトロ書の方は「解釈」の問題と摺り変える向きが多いと思います。後者は、カトリック教会の教義の名残りです。まず3頁の下にある **ἐπίλυσις** から…ここは、プリントをこのまま読んでみま。3頁下半分にある項目です。

ἐπίλυσις, -εως, ἡ (< ἐπιλύω) 解明, 説明 ; II ペト 1:20, πᾶσα προφητεία γραφῆς ἰδίας ἐπιλύσεως οὐ γίνεται ; 聖書の預言はどの一

つをとって見ても、それを書いた預言者自身の解釈・解明を源泉として出来たものは一つもない。預言は(主の御意志を確かめて解釈を下した)人間の(預言を記録した人々の) 解釈を書いたものではない。この文では、第2格形の ἐπιλύσεως は源泉の奪格であり、聖書の προφητεία がどこを取っていても記者自身の(聖霊によらない)神観や歴史観を内容とする作品ではないことを断言し、οὐ γίνεται は完了的なニュアンス(～から出来ている)を持つ現在時称である。

これに対し、「解釈に属すべきものであってはならない」という読み方はこの第2格を属格と見るが οὐ γίνεται との結びつきはかなり強引になる。→ γίνομαι の④を参照。《上の2ペト 1:20 については、教父 Οἰκουμένιος ほか「聖書の記者自身の解釈—預言者自身の神意解明」と正しく受け止めた人たちも古くからいたが、中世の教会による「聖書の解釈は教会の下した解釈に従うべきである」という声を承認する読み方が多数決のようにして残った。英訳では N.I.V.だけが正しく訳出している “No prophecy of Scripture came about by the prophet’s own interpretation.”

20 節と 21 節は反意的対句をなし、20 は「預言は何でないか」(預言者は何をしなかったか)を、21 は「預言は何であるか」(預言者は何をしたか)を対比して、聖書の預言の本質を両側から定義している。この文脈に“読者の解釈というテーマを持ち込むのは唐突と思われる。》

もともと、この読み方は聖書釈義家の間では「少数意見」ということになっていますが、ローマ教会の解釈が絶対化されて固定する前は、ギリシャ人の教父 Οἰκουμένιος など、こう見ていたのです。このペトロ書の言葉は、私が理解する限り、聖書の起源}}靈感による成立を述べたものです。最後は、たいていの人が「灵感による起源」のことだと思い込んでいる第2テモテ書の箇所です。「神の息がこめられてある」という形容詞 θεόπνευστος でこのスピーチを結ぶことにいたします。次の4頁の上半分です。3版の内容に少

し書き加えました。

θεόπνευστος, -ον (<θεός, πνέω, 息を吹き込む) 神の息(霊)を吹き込まれてある, 神の息(霊)がこもっている; II テモ 3:16, *πάσα γραφή θεόπνευστος* は大方の訳文に, 聖書はすべて「神の霊の導きの下に**書かれ**」(新共同訳), 「神の**靈感によるもので**」(新改訳)等, 神の**靈感による過去における成立の意味**に受け止められがちだが, この主語と形容詞補語とを並べた文は, *πάσα γραφή* が**現にその時点で θεόπνευστος** である (ἐστίν) 事実を表現するものである。趣旨は聖書の起源ではなく, **全聖書は神の息(霊=死者を生かす力)を吹き込まれてある言葉であり, 従って, 現にその中から神の霊が読む人の霊に力強く働いて, 死んだ者を生かさずにおかない生きた書物であることを意味する;**ヨハ 3:8, 同 16:8 の聖霊の働きもこの命の働きとつながる。なお, 「聖霊が記者たちに働いて聖書の文を書かせた」事実を明記するのは II テモのこの聖句ではなく, II ペト 1:20, 21 (*ἐπίλυσις* の項を見よ) である。

《参考》*θεόπνευστος* と同じ構成の形容詞の例、ヨハ 19:13 *Λιθόστρωτον* (敷石で覆われた) は, 以前その庭の工事をした際に職人が敷石を使って仕上げた過去の作業に言及するのではなく, ピラトがイエスを裁いている時点で、庭が現に敷石で覆われていたことを表わす。古典・現代語に共通する形容詞 *ἀνθοστόλιστος* (花で飾られた) も, 例えば会場が現に「花で飾られていること」を表わし, 会の前夜に係が「花で飾った」作業を溯って報告するものではない。

最後の一行は「蛇足」かも知れませんが、でも、多くの方が聖書について「それが書かれた時には**靈感によって成立した**」という、それ以上の「蛇足」を(ペトロ書から切りとって来て)継ぎ足し、却ってパウロの趣旨を弱めていることへの、風刺にはなっているでしょう。御清聴ありがとうございました。

(99/06/12, 大阪クリスチャンセンター)

ギリシャ語を学ぶ楽しさ 講演 資料

織田 昭 新約聖書ギリシャ語小辞典 第4版
 《 改訂箇所 の例 》

ἀλάβαστρον, -ου, τό (または ἀλάβαστρος, -ου, ὁ または ἡ J) ① (ローマングラスの) 細頸瓶; 香料などの保存用に使われた容器; 従来, 雪花石膏という鉱石を削りまた削り抜いて作った「雪花石膏の瓶」と考えられたが, 水晶を意味する中国語の「玻璃」がガラス器を指すようになったのと同じく, ἀλάβαστρον は当時シリアのシドンを中心にして造られた, いわゆる「ローマングラス」それも細頸の瓶を指す名称であった; 参照→教文館「聖書大事典」BHH 中の「ガラス」の項, 松永伍一著「ローマングラス」京都書院. ② (語源から理解されていた従来 of 慣例的訳語) 雪花石膏, 雪花石膏の壺 (瓶).

βασιλεία, -ας, ἡ (< βασιλεύω, 王である, 王として支配する) ① 《本来は抽象名詞》 王であること, 王位, 王権, 王の統治, 王の支配; ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ, 神の王権支配 (神が王として統治する出来事) は, 名詞概念としては LXX 本文には見られないが, 「神が王としてあなたを統治する」 βασιλεύσει σου ὁ θεός という預言者の宣言 (イザ52:7) の中に動詞概念として存在する. イエスはこれを ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ (王なる神の支配) また ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν (王なる天の統治) という名詞句に変えて表現された. 「天」とはもちろん「神」を指すヘブライ的表現であり, 「天の」は「神の」の言い換えである. 後者の訳語としての「天国」は (中国語訳を踏襲?) 邦訳としては悲劇的に粗末で誤解を招くものとなった. 「天(神)の支配」, 「王なる天がなさる統治」が妥当と思われる. ἡ βασιλεία はこのように神の行為である以上、(その統治下に「入る」という表現 εἰσελθεῖν もあるにせよ) 幼な子のように「受け入れる」(マル10:15, δέξεται) ものである. ② 《王の統治という原義から転用して》 (王によって統治される) 国, 王国, マタ3:12, 12:25, 26, マル6:23; (集合名詞としての) 国, 国民, 黙1:6. 《①と②の意味の区別について, 「支配と王国の厳密な区別は困難だが, 前者が主要な観念」(岩隈)》なお神の王権支配は歴史が完結する時までは御子キリストの王権支配である; コロ1:13, 1 コリ15:24.

βασκαίνω 妬みの目 (凶眼) で見つめて毒する, 羨みと悪意の視線で相手に災いを及ぼす; ガラ3:1 πῖς ὑμᾶς ἐβάσκανεν; だれが君たちを凶眼の毒に当てたのか?, いったい誰の凶眼に当たってこんなことになったのか! ; アリストテレス以来現代ギリシャ人に至る βασκανία (βασκανιά) の俗信は, 子誉めや若い女性へのお世辞に使う言葉 《Νὰ μὴ βασκαθεῖς.》 (人の羨みの凶眼に当たって病気や早死にをせぬよう!) の中に生きている; 教父 Χρυσόστομος の注「パウロのこの叱責にはガラテヤ人たちへの称賛 (以前の純粋な福音信仰への) も込められている」が示唆に富む.

διαθήκη, -ης, ἡ (<διατίθεμαι, 処置する, 裁量する) ① (自分の判断・裁量で行なう) 意志表示, 自ら裁量したこと, 裁定, 取り決め; 遺言 (書). ② (一方の主体的裁量や約束を他方が受け入れ服する形での) 裁定と受諾の関係, (特に) 神の裁量に服して生じる関係, “聖意志表示=受諾” 関係, “聖裁定=服従” の関係, 「ベリート」の関係; (従来 of 慣例的訳語) 「契約」; 《普通 of 双務契約 or 協定, 協約 of 関係を表す語としては συνθήκη が使われたのに対し, διαθήκη は旧約聖書の「ベリート」また「ベリートを切る」関係に (LXXを通して) 適用された. Kittel神学辞典の Quell と Behm の 30 頁に互る論文を参照. 特に Behm の 「διαθήκη と διάθεσις の意味は近接した関係にある」 (英訳 p. 125) は現代ギリシャ語 of

Εἶμαι στή διάθεσή σας. = I am at your disposal. とつながって面白い. **訳語の私案**として, 例えば, 「新契約」の代りに (神 of) 「新裁量」, 「契約を立てる」の代りに「裁量を制定 (施行) する」等が良いと思うが, 「契約」 or “covenant” に馴れた日本人には異様に響くだろうか? → 動詞 διατίθεμαι の項も参照》

διατίθεμαι (自分の裁量で処理する意味から) ① 思うままに処理する, 自分で事を決め (て委ね) る, 自身の判断で一任する, 遺言する. ② [旧約 of 表現「ベリートを『切る』」をギリシャ語で表現して] (神が民との関係で) 聖なる意志決定を伝える, “聖裁量=受諾服従” の関係を (神 of イニシアティブで) 制定する, “一方的約束=信順” の関係を (神 of 側から) 創始する, (神 of) 裁量を発布 (制定) する; (従来 of 慣例的訳語では「契約」を) 「立てる, 結ぶ」, また (「契りを」) 「契る」という訳語 of 提案もあるが, 上述 of 「裁量による一方的約束への信従」の意味が出ない; 《ヘブライ的表現「ベリートを『切る』」 of 『切る』は使 3:25, ヘブ 8:10, 10:16 ではこの動詞 διατίθεμαι を使って (裁量を裁量する) 訳し, ヘブ 8:8 では ποιῶ で (裁量を施行する) 訳出されている. → 名詞 διαθήκη の項をも参照》

δικαιοσύνη, -ης, ἡ (<δίκαιος, 正しい, of 抽象名詞) ① 正しさ, 義; 神御自身の正義 of 基準, 使 17:31, また神が求める義 of 基準に合致して正しいこと, ロマ 4:3; 神が求める正しさに適うような生き方, マタ 3:15, 同 5:20. ② [パウロ, 特にローマ書で] δικαιοσύνη θεοῦ, 神 of 義 (神がなさる義 of 御業), 神御自身が義を実現なさる (不義で不敬虔である者を義に変えてしまう) 神 of 行為, 人間が自分で作る「人の義」 of 反対, 人間が自分の努力, 律法 of 行為によって自ら達成しようとする義に對立して (ロマ 10:3) 神御自身の意思によりキリストを通して与えようとなさる義, 人はただ降伏する形で (ロマ 3:22, 同 1:5) 受けるしかない義; 《参考》 I コリ 1:30 で神 of 行為を表す ἁγιασμός, ἀπολύτρωσις と並列されることから「神 of 義」は「義による神 of 支配 of 御業 (行為)」として理解される. イエスも マタ 6:33 で, 神 of 義が人間 of 全存在を支配することを δικαιοσύνη θεοῦ と言われたが, 対句をなす βασιλεία τοῦ θεοῦ の意味に近づく. ② 公平, 公正, 正義, 行伝 17:31, 黙示 19:11 等.

εἰρήνη, -ης, ἡ ①平和, 泰平, (戦いや迫害が止んだ時の)平穩—使9:31. ②(人と人との間の)融和, 和合, 和睦. ③(LXXの用法)安全, 無事, シャローム, 健康, 福祉; この意味からヘブライ的なあいさつの句, ὑπαγε (πορεύου) εἰς εἰρήνην (シャロームのうちに行けよ), εἰρήνη ὑμῖν (シャロームが君たちに!) 等ができた ④ [パウロ書簡で] (切り出しの挨拶の結びにパウロが使う「恵みと平和」また「神との平和」—ロマ5:1, 等では「霊的平安」や和睦・和解というより) 神から人に与えられる究極の平和=シャロームとしての**キリストの救い**が豊かに諸君のものであれ…と祝福を与え、またその確実な所有を断言しているものと理解される. 神の義であるこの救いをパウロはまず「恵み χάρις」でその無償性の面から、「平和 εἰρήνη」でヘブライ語の形容詞シャレームの内容=欠けなき完全な原型の回復の面から定義・描写している. χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη = 「義の業によらぬ救い、しかもアダムの輝きの回復でもある救いが君たちに！」《Kittel神学辞典 εἰρήνη の項にRadとFoersterによる論述を見よ。》

ἐπίλυσις, -εως, ἡ (<ἐπιλύω) 解明, 説明; IIペト

1:20, πᾶσα προφητεία γραφῆς ἰδίᾳς ἐπιλύσεως οὐ γίνεται; 聖書の預言はどの一つをとって見ても、それを書いた**預言者自身の解釈・解明を源泉として出来たものは一つもない**. 預言は(主の御意志を確かめて解釈を下した)人間の(預言を記録した人々の)解釈を書いたものではない. この文では第2格形の ἐπιλύσεως は源泉の奪格であり、聖書の**προφητεία**がどこを取ってみても記者自身の(聖霊によらない)神観や歴史観を内容とする作品ではないことを断言し、οὐ γίνεταιは完了的なニュアンスを持つ現在時称である。「解釈に属すべきものであってはならない」という読み方はこの第2格を属格と見るが οὐ γίνεταιとの結びつきはかなり強引になる. → γίνομαι④を参照. 《上の2ペト1:20については、教父 Οἰκουμένιος ほか「聖書の記者自身の解釈—預言者自身の神意解明」と正しく受け止めた人たちもいたが、中世の教会による「聖書の解釈は教会の下した解釈に従うべきである」という声を承認する読み方が多数決のようにして残った. 訳文の中ではN. I. V. だけが正しく訳出している. 20節と21節は反意的対句をなし、20は「預言は何でないか」(預言者は何をしなかったか)を、21は「預言は何であるか」(預言者は何をしたか)を対比して、聖書の預言の本質を両側から定義している. この文脈に“読者の” 解釈というテーマを持ち込むのは唐突と思われる。》

θεόπνευστος, -ον (<θεός, πνέω, 息を吹き込む) 神の息(霊)を吹き込まれてある, 神の息(霊)がこもっている; IIテモ3:16, πάσα γραφή θεόπνευστος は大方の訳文に, 聖書はすべて「神の霊の導きの下に書かれ」(新共同訳), 「神の靈感によるもので」(新改訳)等, 神の靈感による過去における成立の意味に受け止められがちだが, この主語と形容詞補語とを並べた文は, πάσα γραφή が**現にその時点で θεόπνευστος である** (ἐστίν) 事実を表現するものである。つまり, 全聖書は神の息(霊=死者を生かす力)を吹き込まれた言葉であり, 従って, 現にその中から神の霊が読む人の霊に力強く働いて, 死んだ者を生かさずにおかない生きた書物であることを意味する; ヨハ3:8, 同16:8の聖霊の働きもこの命の働きとつながる。なお, 「聖霊が記者たちを動かして聖書の文を書かせた」事実を明記するのは2テモのこの聖句ではなく, むしろ2ペト1:20, 21 (ἐπίλυσις の項を見よ) である。《参考》同じ構成の形容詞としてヨハ19:13 λιθόστρωτονは, 以前その庭の工事をした際に職人が敷石を使って仕上げた過去の作業に言及するのではなく, ピラトがイエスを裁いている時点で, 庭が現に敷石で覆われていたことを表わす。古典・現代語に共通する形容詞 ἀνθοστόλιστος (花で飾られた) も, 例えば会場が現に「花で飾られていること」を表わし, 会の前夜に係が「花で飾った」作業を溯って報告するものではない。

ἱλαστήριον, -ου, τό (形容詞 ἱλαστήριος, -ον の中性形 <ἰλάσκομαι, 前々項) ① [旧約LXXに親しんだ人が読んで最も自然な意味として] 贖いの座, 贖いのふた, 贖罪蓋, 贖罪所; 幕屋の至聖所にあった契約の箱の上においた金の板。ケルビム二体が翼を広げてこれを覆っていたため, 「カポーレト」(贖罪のふた)と名づけられ, 贖罪の日にはその上にあがないの血が注がれて, 罪の覆いとされた, 出25:18, レビ16:2, ヘブ9:5, ロマ3:25. ② [形容詞 ἱλαστήριος の中性形が表現する, より抽象的な意味として] 贖い清めるためのもの, 贖いきよめの効能をもつあるもの, 罪の贖いの供えもの, 罪の蔽い. ③ [古典以来の語義から引き出した意味として] 宥める力を持つもの, 宥めの供え物; 文語訳, キリスト新聞社訳, 前田護郎訳はこう訳している—前項末尾の藤原藤男氏の主張を参照; 日本正教会訳「挽回の祭」はこれに近いが, むしろ前々項のStottの解説中に触れているゼカリヤ書, マラキ書の角度から見た訳語か…。《新改訳を除く邦訳は大体ロマ3:25を②の視点から解釈して「贖いの供え物」と訳し, ヘブ9:5とは区別しているが, 著者自身はルター訳や新改訳と同じように①の「贖罪蓋」の意味に受け止めるのが一番自然であると考え、キリストを(幕屋の贖罪蓋に相当するものとして)神みずからそこへ「お据えになった」 προέθετο という動詞の意味も生きてくると思う。》

καταλλαγή, -ῆς, ἡ (<καταλλάσσω, 次項) ①(人間同士の関係の改変としての)和解。(妻の)復縁—新約には名詞形の用例なし。②(神が人を καταλλάσσειν, καταλλάξαι なさる行為またその結果としての)(神との関係の)根本的改変,(神の前での身分の)完変,霊的な身分の一新:
 τὴν καταλλαγὴν ἐλάβομεν, 神がお与えくださった新しい身分を受けた, 神との新しい変えられた関係を頂くことになった, ロマ5:11; διακονίαν τῆς καταλλαγῆς, 神が人の身分を変えてくださる御業に仕える務め, II コリ5:18;
 τὸν λόγον τῆς καταλλαγῆς, 神との関係を一新してくださるという内容のメッセージ(福音); ἡ ἀποβολὴ αὐτῶν καταλλαγὴ κόσμου, 彼らが(一時)捨てられていることが世(より広い範囲の人間)を神との新しい関係に結んだとすれば, ロマ11:15:
 《漢訳聖書が「和解」と訳して以来, 日本語にも取り入れられ, 神学用語としての「和解」が慣例となったが, 次項に説明するように, 神が人を καταλλάξαι するという聖書の発想に「和解」はそぐわない。》

καταλλάσσω (<κατά, 強意, ἀλλάσσω, 変える) (ア受 κατηλλάγην, 分 καταλλαγεῖς) ①(人間同士の関係について) [受動] (妻が夫に)復縁する,(元の関係を)回復してもらおう, I コリ7:11. ②(神と人との関係については常に, 神が人を καταλλάσσειν, καταλλάξαι なさり, 人は受動的に καταλλάσσεσθαι, καταλλαγήναι するという形で) [能動] (神が人の)霊的身分を一新する,(人の)神との関係を根本から変えてしまう,(人を)完全に变えて御自分のものになさる; [受動] (人が神によって)(霊的な身分を完全に变えられた新しい被造物とされ)神との新しい聖なる関係につないでいただく, 一新されて神のものとなる; θεὸς ἦν ἐν Χριστῷ κόσμον καταλλάσσειν ἑαυτῷ, 神はまさにキリストを使って世の人の身分を一新して御自分のものにしようとなさって, II コリ5:19; τοῦ καταλλάξαντος ἡμᾶς ἑαυτῷ διὰ Χριστοῦ, キリストによって私たちに全く新しいものに変えて御自分のものになさった方(神)から, II コリ5:18;
 κατηλλάγημεν τῷ θεῷ διὰ τοῦ θανάτου τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ, 御子の死のお陰で私たちは(以前とは全く違う)新しい身分を受けて神のものとなされたのである, ロマ5:10;
 καταλλάγητε τῷ θεῷ, (全く変えられた)神との新しい関係を頂戴しなさい, II コリ5:20: 《Kittel辞典Vol. 1にBuchselの論述を見よ; 「和解させる」, 「和解させていただく」は漢訳聖書→文語訳以来の日本の理解を表現しているが, 使徒パウロがローマ書とコリント書で表現した内容からは大きくズレるように思われる》.

καταφρονῶ (έω) (<κατά, 反対, φρονῶ, 思う) ①軽蔑する, 侮る, またそれを行動であらわす。②軽んじる, うとんじる, 問題にしない, 意に介さない: [人の属格と] ~を, [事物の属格と] ~のことを; 1 テモ4:12 μηδεὶς σου τῆς νεότητος καταφρονεῖτω, 若年の故にお前を軽んじることは(この私パウロが)だれにも許さない—3人称への命令形は「軽んじられないようにせよ」というテモテへの注意と言うよりは, 「何びともテモテを軽んじることは断じて許さない」という使徒パウロの後ろ盾と保証の言葉である。

κληρονομία, -ας, ἡ (<κληρονόμος, 次項) ①相続財産, 嗣業, 遺産, 継承物, 受け継ぐことになっている財産. ②(すでに相続して自分の所有となっている)所有物, 財産. ③神から受けて確かにわが所有となっている所のもの; 旧約では約束の地カナン, 新約では「神の王権支配」, 「永遠の命」が信仰者の κληρονομία (約束による確かな所有) として語られるが, 旧約にも「主ご自身が」私の κληρονομία であり, 主にとっては「民」が御自分の κληρονομία であるという言葉もある(詩16, 詩119): 《聖書中での κληρονομία の意味の重点は, ギリシャ語の語源から来る字義よりヘブライ語の「ナハラ」の内容とつながり, 所有権の継承の意味(次項を参照)よりはむしろ, 「神が私に与えたもの, また私に約束したものが『わが所有』であることの絶対的確かさ」という点にある. 継承の意味が生きているとすれば, 「救いは相続財産であって, 私の必死の努力によって獲得するものではない. キリストの贖罪の死がこの救いを可能にし, 神の召しに応じる者が信仰で受ける」という点(ヘブ9:15, 1ペト1:4)に含蓄されている》.

λέπρα, -ας, ἡ (<λεπρός, 次項) 重い皮膚病; レビ記13章の「ツアラアト」を英訳聖書が“leprosy”と訳したため「ハンセン氏病」を指すものとして理解された. レビ記13章の「ツアラアト」はむしろ広い意味での(恐らく伝染性の)重い皮膚病の総称で, 人体の病変以外にも家屋の壁を侵す特殊な黴(かび)をもこの名で呼んだことが分かる. ギリシャ語の語源から言えば λέπρα は「うろこ状の病変で覆われた」症状の(λεπρός)病気であり, ギリシャ医学の祖 Ἱπποκράτης の文献も未だ厳密にハンセン氏病を特定している訳ではない. イエスはハンセン氏病の患者を《θέλω, καθαρίσθητι》の一言で癒してしまう力をお持ちであった. ただ, マタ8:3の λέπρα や同:2の λεπρός がレビ記の「ツアラアト」の患者であったか, その後ラテン語を通して西欧語に固定して行った「ハンセン氏病」の患者であったかは, 別の検討と解釈を要する問題である.

πάρεσις, -εως, ἡ (<παρίημι, 見逃す, 赦す) 見逃すこと, 無罪放免, 罰の免除, 赦免; ロマ3:25b-26a

διὰ τὴν πάρεσιν τῶν προγεγονότων ἀμαρτημάτων ἐν τῇ ἀνοχῇ τοῦ θεοῦ, すでに犯されてしまった罪過を神の寛恕(広いお心)で全面的に赦免なさろうとして;

τὴν πάρεσιν はキリストによる完全な赦し(πάρεσις=ἄφεσις)を意味し, 中世以来の古典的解釈に見るような, アダムからキリストまでの間の「罪の処分も義も無いままの看過」(=使17:30 ὑπεριδών)を言うのではない; πάρεσις が語源から「一時的見逃し」を指すのではないことは, ἄφεσις が語源から「そのままにして放置する」事を指さないことと同じである; 上記ロマ3:25b διὰ τὴν πάρεσιν 以下の意味は「この(神の義に示された)全面的な赦免は, まさに神の広い心から出たものだったが, こうして, イエスを信じる足場に立つ者を“義人に変える”という形で, 神御自身が義を実現せずにおかぬ方であることが, 事実をもって示されたのである»; 参照ケーゼマン註解, フランシスコ会訳.

παρθένος, -ου, ἡ ①処女, おとめ, 娘; マタ1:23の παρθένος はイザ7:14のヘブライ語名詞「アルマー」(若い女)のLXXにおける訳語に由来するが, マタイは明らかにこれを「処女」の意味に用いて(1:18)おり, ルカ1:27の παρθένος もマリアの天使への言葉(1:34)から間違いなく「処女」の意味であり, マタイとルカがこの語にこめた意味と意図は明白である. ②(象徴的に男子の)童貞; 黙示14:4では未だ女を知らない男, 童貞者の意味で使われている. 口語訳「純潔な者」. ③(初代教会の社会事業の用語として, 教会が世話している)孤児の女子, 被保護者である女子孤児; I コリ7:36のπαρθένος は恐らくコリント教会の長老たちや, 比較的裕福なキリスト者が自分の家庭に引き取って世話をしていた身寄りのない女の子のことであり, ここでは婚期を過ぎようとするこのようなὄρφανήと自分の息子(或は配偶者のいない本人)との結婚の問題が論じられているものと見られる一詳しくは1964年アテネ大学神学年刊誌に発表されたΜάρκου Σιώτου: Ἡ Φροντίς τῆς Πρώτης Ἐκκλησίας ὑπὲρ τῶν Ὀρφανῶν Κορασίδων (Ἀθήναι, 1964)を参照.

πλήρωμα, -τος, τό (<πληρῶ, 前項) (動詞πληρῶの動作の結果生じたもの) ①満たされたもの, 満ちて(充滿して)いる状態; 充滿, 成就, 満了. ②(欠けた所や空いている部分を)満たすもの, 完成するもの, ロマ13:10; 充填物, 詰め物, (布等の)つぎ; エフエ1:23 τὸ πλήρωμα τοῦ τὰ πάντα ἐν πάσιν πληρωμένου はヒエロニモス以来「全てを使って全てを満たす方(神)の充滿が教会である」と①の意味に解釈されることが多いが, ここはむしろ, (この空虚な世界に)「神が詰め込んだ充填物(詰め物)こそ教会なのだ」と②の意味に読む方が, パウロの趣旨に沿うかと思われる. 古代では, 中空の船を満たすものとして船員たちが πλήρωμα と呼ばれ(現代では航空機の乗員)また都市国家の住民も地の πλήρωμα と考えられた; ロマ11:12 τὸ πλήρωμα αὐτῶν は恐らく①の意味の「彼らの充滿(充足)」つまり, パウロが現実に見ていたユダヤ系キリスト者の寥寥たる状況とは見違えるような十分な数の「ユダヤ系キリスト者が満ちるとき」.

ποιμήν, -ένος, ὁ 羊飼, 牧者; 羊飼いは常に先頭に立って羊の群を導き, 牧草地に連れて行って食物を与え, 流れの辺(ほとり)で水を飲ませ, 野獣などの外敵から身を以って羊を守った. 新約聖書では教会の年寄りたち(長老)を霊的な意味でこのように呼んでいる(エフエ4:11)が, τοὺς δὲ ποιμένας καὶ διδασκάλους は「牧師」と「教師」という二つの教職の先例を示すのではなく, 「教える者としての羊飼」(長老)の意味であることは, 先行する三者と並べての冠詞の使い方から想像される; 絶対的な意味では, キリストがすべての信徒の牧者である; ヘブ13:20, I ペト2:25.

類語: ἐπίσκοπος (配慮者, 庇護者), πρεσβύτερος (年寄り, 長老); 本項の ποιμήν を含めてこれらの語は, 固定した「役職名」や聖職の「階級」として解すべきでない. これらはむしろキリストによって福音信仰において成長することを許され, 名実共に年長者となる恵みを得た者が果たした(果すべき責任を与えられた)機能

を描写した名称である。誰の目から見ても霊的年長者（πρεσβύτεροι）と認められて会衆の「年寄り職」として専任された成熟した信徒たちが、群の霊的保護者また配慮者（ἐπίσκοποι）の務めを果し、比喩的に言うなら、羊たちをποιμαίνεινする ποιμένεςの任務をキリストから与えられていた。 **以下略**

τυμπανίζω（<τύμπανον, ティンパニ, timpani [打楽器の一つ] の語源, 「銅鑼太鼓」）拷問にかける, 銅鑼太鼓の刑に処する, ; Arndtによればτύμπανον（一種の拷問の道具）によって拷問すること, RobertsonやAbbott-Smithは「叩いて拷問する, 叩き殺す」意味とする; 《参考》マカバイ記IIに出る「責め道具」τύμπανονがマカバイ記IVでは「車輪」τροχόςと呼ばれていることから見て, 一部の映画製作者が再現しているように, 円筒の局面に体の一端を固定し, 他の端を地に打ち込んだ杭か台に固定してから, 円筒を回転させ体を引き延ばして, 太鼓の皮のように張った側を叩いて殺したものと想像される (Bruce) ; τύμπανον の名はその拷問台の形状と「太鼓のように叩き殺す」こととから?.

υπέρακμος, -ον（<υπέρ, 越えて, ἀκμή, 盛り）年ごろを過ぎた, 盛りを過ぎている; I コリ7:36 ἐὰν ἦ υπέρακμος, (世話している孤児の娘が) 適齢期を過ぎようとしているなら — παρθένος の項③を見よ) ; 新改訳はI コリ7:36を「自分の娘」と解釈する点を除けば, その παρθένος が υπέρακμος であるなら…と正しく読んでいる。これに対し, 口語訳, 新共同訳, フランシスコ会訳はWeiss以来のドイツの釈義家の仮説に基づいて, すでにコリントの教会に「霊的結婚誓約」geistliches Angelohbungの風習があつて, 同じ屋根の下に共同生活する男女の男性の方が「情熱の耐えられる限界を越しているならば」と υπέρακμος の主語を男性と見る不自然な読み方を取っている。編者は παρθένος の項③ に紹介したアテネの Mārkos Σιώτης の1964年の論文も指摘する通り, この読み方には十分な根拠が無いと考える。

ώραίος, -α, -ον（<ώρα）（原義：季節の, 旬—シュンの）①時機を得た, タイムリーな; ロマ10:15 ὡς ώραῖοι οἱ πόδες τῶν εὐαγγελιζομένων, 福音する者たちの足は何とタイムリーに来ることよ, 時機を得て素晴らしいことよ。②きれいな, 美しい, 麗しい, 魅力的な; 《参照》現代語では専ら②の意味に使われるが, 本来は「季節の」, 「旬の」を意味した。上記ロマ10:15に引用されるイザ52:7については LXXの ὡς ὥρα (なんと適時に) から見ても, これは福音使の足の美しさを称えて伝道者の使命の尊さを伝えるのではなく, 神が遣わす福音使が, 神の定めた最も適切な時機にタイムリーに来ることを感嘆する文であり, またそう見る方がローマ書10章の文脈と趣旨にも適合する。